

学習者の主体性を重んじた日本語教科書をめざして

—新しい教材シラバス作成の実践例—

曹大峰 林洪 篠崎摂子

北京日本学研究センター 北京師範大学 国際交流基金日本語国際センター

外国語としての日本語教育では、教科書の役割が大きい。中国ではこれまで、教材編集の実践活動が教室活動とともに重要視されてきたが、現在は、教材研究を通して、言語学・外国語教育学・教育工学など広く学際的な成果を盛り込んだ新しい日本語教材の作成実践とその研究活動が行われている。その一例として、北京日本学研究センターでは、最近、中日両国の大学や教育部門の研究者¹の協力により、「中国の日本語教育における主幹科目『総合日本語(精読)』に関する総合研究」と「中国の日本語教育のための新しい教材像に関する研究」に続き、教育部「十一五企画」教材出版計画で採用された新しい教材の作成とそのための総合シラバスの研究が実施されている。

本報告では「学習者の主体性をどのように発揮させるか、学習者の主体性と教師の主導性の関係をどう考えるべきか」という点をめぐって、上記教科書シラバスの作成研究の現状を報告させていただきたい。

1、総合シラバスの目標と背景

中国で市販されている大学日本語専攻用の教科書は、ほとんど文法先行のものであって、話題先行の総合シラバスによるものは見られない。しかし、国際化時代の到来や WTO 加入と人間重視の社会作りというここ十年の中国社会の新しい変化に応じ、初中等教育での外国語教育や大学の英語教育では理念・ガイドライン・教材・教授法において著しい進化が見られ、総合運用能力および学習者・学習過程・学習ストラテジーが重視されるようになった。一方、文法シラバスを中心に作られた教科書を使っている中国の日本語教育では、教科書に関する教師と学生の評価が大きく分かれており(冷 2006)²、学習した文法が運用でつまづいてしまったり(蔡 2006)³、文法知識を教科書から大量に得ていても実際にコミュニケーション能力が欠如して(楊 2006)⁴、全体としてひきつけるところが少ない(林 2007)⁵

¹ 中国では北京外国語大学、北京師範大学、北京大学、北京第二外国語大学、日本では国際交流基金日本語国際センター、国立国語研究所、早稲田大学、お茶の水女子大学等から参加している。

² 参考文献 p227-243

³ 参考文献 p37-47

⁴ 参考文献 p244-253

⁵ 北京師範大学教科書研究ゼミの調査結果より

と指摘されている。問題の根本は主に文法解説を中心とする教授内容と教師の講義を中心とする教授形態の2点に集中していると考えられる。

そこで、われわれは新しい教科書の企画とシラバスの作成にあたり、教授内容と教授形態を改革しようと、次のような目標を定めた。

- ◆各科目の関連と整合をはかり知識と技能の融合を目指した大学日本語専攻基礎段階用シリーズ教材（総合基礎編・聞く話す編・作文基礎編）を開発する。
- ◆使用場면을重視したトピック先行の総合シラバスを導入し、大学生の知的水準に合う学習内容と能力重視のタスク型学習形態を提示する。
- ◆トピックとタスクに見合った教育文法を考案し、文法運用能力の養成を目標に場面重視の文法配列と学習者向けの文法内容を提示する。
- ◆マルチメディアによる多角的な補助教材、教授指導要領書と講義用PPTを作成し、学生の自律的学習と教師の持続的成長をサポートする。

ここでは、今回のパネルディスカッションの主題との関連が深いトピック先行の学習内容と能力重視のタスク型学習形態に関する研究成果を中心に報告する。

2、トピックとタスクの作成と工夫

まず、トピックについて、大学生の知的水準を出発点にし、これまでの学習経験と学習能力（母語と英語）を相乗的に生かし、社会のニーズと学習者のニーズ（多文化交流と人間的成長）に応じるように、教科書の話題内容（20トピックで60課構成）の考案と工夫をした。たとえば、資料①を今までの教科書の内容に比べればある程度察知されるように、知的でいままでと少し違った話題や議論にしやすい話題、また、ごく普通の物事を普通と違った角度からどう見直すか、普段と違った物事をどう見るべきか、いままで知らない情報や典型的な日本語表現などに、特に留意をして素材を集めたのである。

そして、タスクの設定は現実性と到達点を大切に、場面性・実用性・達成感を重んじて、最新の教育参照基準（CEFR）と能力試験の出題傾向（JLPT）を参考にして、総合的段階的目標と多様な学習活動の導入を提案した。たとえば、リストアップ、配列、分類、比較、情報交換、問題解決、ディスカッション、ディベート、インタビュー、創作（ミニ広告、レポート、小論文、記事、壁新聞、パンフレット）等々の活動を、ペア、グループ、アクティビティ、LTD、ワークショップなどの形式で展開することである。

また、教科書に自主型・協働型・創作型の学習活動を導入するだけではなく、タスクチェー

ンでそれを連結し、観察・発見・整理・産出・定着という学習プロセスに位置づけることによって、学習プロセスにおける学習者の主体性を明確に導き出していこうと、総合シラバスで提案している。たとえば、下記の総合シラバスのサンプル(第1冊と第3冊各一課ずつの一部)に見られるように、トピックや学習目標は具体的な学習活動に支えられていて、その学習活動は観察・発見・整理・産出・定着のタスクチェーンで組み込まれているのである。

| トピック | 目標 | ステップ | 学習活動 | タスク活動 | 文例(文型) | 機能 | 文法語彙 | 練習 |
|-----------|-----------------|-----------------------|---|--|--|--|---|-------------------------|
| ネットミーティング | ネットで日本の大学生と知り合う | 自己紹介 相手に聞く 家族紹介 | 観察:事前・素材(読・聞) 発見:意味・形式(文型) 産出:形式・話/書 まとめ:評価・定着 | 名刺を作る メールで会員登録と自己紹介 名前の漢字を説明する クラスの名簿を作る ネットで個人情報を交換する | (私は)李です 出身は北京です 趣味は読書と音楽です お名前は? 北京の名物は何ですか 父は会社員です 母は会社員ではありません | 自分について話す 相手について尋ねる 他人について話す 名前、所属、出身地、名物、趣味を伝える | (Nは)Nです(ではありません) か>は>の>と 初めまして・どうぞよろしく はい/いいえ ~さん、お(ご)わたし 出身・趣味>名前・名物>学部 | 代入<否定 変換<応答 結合<談話 |

| トピック | 目標 | ステップ | 学習タスク | 発展タスク | 文例(文型) | 機能 | 文法語彙 | 練習 |
|-------|-----------------|-------|---------------|--------------------|------------------------------------|----------------|------------------|----|
| 風景描写 | 写真付の観光パンフレットを作る | 八景の調査 | 観察:事前・素材(読・聞) | 八景比較表整理 | 艶を競う | 表現を定型化する | Nからなる | |
| | | | | 定型表現集整理 | 朱く彩られた雲 | 風景を描写する | Nをもととする | |
| | | 八景の発表 | 発見:意味・形式(文型) | 地元の観光案内作成 | 屹然と立つ城 雪に覆われた山野 | 擬人法を使う 背景説明 | Nを背景に わけではないが | |
| | | | | | 産出:形式・話/書 | 観光ガイド実演 | 人を別世界へといざなう | |
| 八景の作成 | まとめ:評価・定着 | | 賞賛を惜しまない光景 | 比喩表現を使う 凝縮表現を使う | ことだろう 文章構成 情報連結 自動詞と他動詞表現 | | | |

このように、新しい教科書の総合シラバスはトピックとタスクの作成と工夫において、新しい実践が凝らされたものであるが、その作業を通してわれわれがよく直面した課題は文法シラバスとの関係であり、学習者の主体性や教師の主導性との関係であった。

3、主体性・主導性との関連

ここで、シラバス作成研究の過程を振り返り、学習者の主体性や教師の主導性との関係に少し触れてみよう。

まず、トピックの内容が大学生の知的水準・学習経験と学習能力・学習動機とニーズを重

視するという事は、教科書の内容から学習者を重視しその主体性を導き出そうとする考えに基づくことであるといえよう。ただ、学生の関心や趣味にどのように合わせていけばいいのかについては、最初は深く考えられず、関心や趣味の薄い内容は受け入れてくれるのかと心配していた。その後、チーム会議やお茶の水女子大学岡崎研究室の協力で議論の機会を得て、トピックに選んだ話題は必ずしも学生の現在の趣味や関心に合致するものばかりとは限らず、むしろ学生の人間的成長と持続可能な学習をめざして今後の社会発展や人類共生の未来課題へ導いていくためのものでもよいと認識を深めてきた。つまり、教科書の内容は学習者の主体性と教師・教材の主導性を共に配慮すべきである。この考えにおいて、総合シラバスの作成実践を通して、関係者の間で共同認識が得られたのである。

また、タスクについても、最初は個々のタスクのそれぞれの目的を意識して設計してきたが、実際にどのように教科書で学習し指導してトピックの目標を達成していくかを考えているうちに、学習のプロセスを設定する必要性を感じてきた。そして、学習プロセスの設定を通して、学習者の主体性や教師の主導性もこのプロセスで明記しコントロールすることができることに気づいたものである。ただ、ここでもやはり、プロセスの設定と明記は逆に学習者の主体性や教師の主導性を縛ってしまうのではないかという心配がある。これはプロセスの設定に注意を要するところであるが、今後の課題はむしろ、いかにプロセスの設定を通して学習活動における学習者と教師の関係を最適な状態に保持し、学習者の主体性と教師の主導性のメリットを最大限に発揮させていくかであろう。このことによって、急速に発展する中国の大学の新設学科と教師成長の支援に役立ち、教材のあるべき役割が果されることを期待している。

以上、筆者らがかかわっている中国の新しい日本語教科書作成の実践を踏まえて、学習者の主体性に関する認識と実践への取り込みについて報告したが、発表者の方々と参加者の皆様にコメントをいただき、共通の関心点や課題を交流することができればと願っているものである。

参考文献

曹大峰ほか (2006) 《日語教学与教材創新研究》 高等教育出版社

曹大峰 (2008) 「中国における日本語教科書作成 一歩み・現状・課題一」『言語文化と日本語教育』 35号